



青年海外協力隊のひとりとして ～ネパールと共に

八百屋さやか



現在、私はJICAの青年海外協力隊としてネパールに赴任している。協力隊の職種は120種類を超えるが、私は「環境教育」隊員として赴任し、首都カトマンズ市の隣、ラリトプル市市役所の環境衛生課に勤務している。職場の主要業務は廃棄物管理で、市役所からボランティアへの要請内容は、市民への環境教育、主に廃棄物関係の意識向上ということで、ゴミの分別法や生ゴミコンポスト作成指導などの3R（Reduce, Reuse, Recycle）教育を通して、ごみ排出削減を目指したアプローチを行うことが主要業務となっている。職場では、特に子どもをターゲットとした環境教育を行いたいため、現在まで約半年間、市役所指定のパイロット校5校を巡回して活動している。実際の活動について述べると、一つは学校環境改善がある。内容は、学校設備や（トイレ、教室、飲料水、校庭の自然など）の有無や児童の衛生状態の調査を行い、改善を行うものであった。多少環境教育の枠から外れる感があり、当初戸惑いを感じたが、貧しい公立学校の状況が把握でき、そして、少ない予算で何が改善できるのかを同僚や教師と考えた結果、生徒たちの力を借りて、校庭の庭造りを手作りで行うことができた。また、その他の業務としては、ゴミ収集車に乗り、市内回収ルート の時間管理と収集箇所のモニタリング（time and motion）や、バイオガスプラントの設置立会い（エネルギー資源の少ないネパールでは、村を中心にバイオガス事業を推進している）、コミュニティコンポストの設置計画などを業務としている。日本では、食品分析や環境実験助手の経験しかなかったので、自分が今まで学んだことは、まったくと言って活かせていないのが現状で、日々新たな仕事を経験しながら追いついていくので精一杯である。日本では予想のできない問題－突然の学校封鎖、道路封鎖、停電（現在一日8時間）、断水など－も多数に生じるが、徐々に面食らうのも慣れてきてしまった。

ネパールは小さい国だが（北海道の約1.8倍）予想以上に多くの問題を抱えている。環境問題に関して言うと、私の関わる廃棄物問題は、特に深刻である。エネルギー不足のため、焼却処理施設は作れない。ネパールは海もなく、土地も少なく、道も悪いという理由から処分場問題が特に大きく、現在の処分場も、住民からの抗議運動・金銭要求による道路封鎖が度々生じる上に、あと1年の残余年数を残すのみである。ゴミの分別はされておらず、

ゴミ捨て場から有価物回収を行う人たち（子どもを含む）がゴミから有価物を集め、リサイクル業者に販売し、その日の生計を立てている状況である。政情も不安定であり、人事異動も多く、物事がなかなか前へ進まない。毎日、オフィスでは問題が生じ（収集車の故障、最終処分場の住民による封鎖、オイルショックなど）、カウンターパート（現地で業務を共に行うパートナー）との悩みは尽きない。

しかし実は、ゴミが多いかというと、日本の半分以下なのである（一人一日当たり400g）。貧しい国で物が少ないせいもあるが、この国ではたいいていのものが修理されて再利用されていた。靴でもカサでも電化製品でも、何でも壊れても直ぐに捨てず、必ず修理する職人がいたり、自分で直せたりする。どうしようもなく壊れたと思って彼らは上手に直してくれる。そんな時、日本で物を修理する時、新機種の購入を勧められることを改めて考えさせられる。日本で、モデルチェンジやシステム変更により、使えなくなった機材が今までどれだけあっただろう。本当に、資源の持続可能性を考えると、どちらが正しいのだろうか。ネパールは確かに発展途上で、貧しく、政治も不安定、技術もお金も乏しいが、その分、自分たちでものづくりをする力やものを大切にする意識は、現在の日本人より高いと感じている。現在、日本が失ったもの（文化や宗教心、習慣、人付き合いなど）が豊かに残るこの国で、開発や経済至上主義について今一度考えさせられている。

ところで、私がこの青年海外協力隊を受験したのは、今から約2年前であった。ただ、参加意欲を抱いたのは修士の頃（8年前）からであり、そのころは、海外生活への体験願望という、好奇心一点であった。しかし、当時は参加できるような技術的经验も乏しく、海外に飛び込んで仕事ができる自信もなく、先送りしていた。それから6年間、食品企業で分析業務、その後大学の環境系実験助手の経験を経て、再び協力隊の受験を志す機会を得た。また、技術士第一次試験に合格し、技術士補（生物工学）の資格（文部科学省所管の国家資格）を取得したことも、ひとつのきっかけとなった。先輩技術士の方々と交流させていただき、自分の世界が広がったお陰で、更なる外の世界へ飛び出したいと思うようになっていた。

そのころは、単なる好奇心のみでなく、とにかく自分

を必要としてくれる所へ行こうと思っていた。また、自らも、途上国で学ぶことを必要としていた。協力隊の仕事は、一方的に技術を教えることではない。自分も現地の人々と共に学び、共に学び合うことである。特に環境分野を自分の生涯の仕事としたいと考えた後からは、国内のみならず、一度、海外の現状も自分で見る必要があると思った。現場で何が起きているのか？原因は？解決手段は？実際目で見て経験するための2年間は決して損にはならないと思った。日本で培ってきた価値観や生活レベルがどのように変化するのも興味があったところである。何がかわるか、自分でも想像のできない世界に一度は飛び込んでみても良いのではないかと、そんな気持ちで応募を決意した。

ネパールに赴任する前、現地の状況についてはまったく想像もできなかった。途上国というところが、日本とどう違い、どのような生活をしているのか、メディアに見る途上国は極端な情報が多く、その中で生活することに大きな不安を感じながらの赴任であった。また、現地の人々とどのように関わり仕事をするのか。我々は旅行者ではない。現地の人と共に仕事をする義務がある。自分は本当に受け入れられるのか、それとも避けられるのか、どうやって一緒に仕事を進めて行けばよいのか、不安が募っていた。しかし、現在思うことは本当にこの国に巡り逢って良かったということである。いくらかの選択肢があったが、「どの国でも自分が役に立つならば」と特にネパールとは決めていなかった。しかし今、この国の人たちに触れ、偶然の出会いに感謝している。すべてが飽和状態の日本に比べ、途上国は物質が不足しているゆえか、その分人々の心は豊かで温かい。私も職場のネパール人の同僚から、家族のように思いをかけてもらっている。いつか、この国を離れると思うと、どんなに辛

いだろうかと今から感じている。ネパールはカースト制度が今でも色濃く残っており、自由に職業が選べない。しかし、彼らは自分の仕事に大変誇りをもち、先祖から受け継いだ技術を大切に守り継承している。徐々に都市化が進み、若者や技術者の海外流出が目立ってはきたが、どうかすべてを開発と引き替えにしてほしくないと願う今日この頃である。

私はこちらに来て半年の間に、このような本当にたくさんのことを学んだ気がする。そのすべてが自分にとってプラスになっていると感じ、また人生観も変化した。残りの1年半で、まだどれだけのことが学べるのだろうか、楽しみに感じながら日々を過ごしている。引っ込み思案であった自分にとって協力隊参加は大きな選択であったが、自分の選択は間違っていなかったと感じている。ここで学ぶ多くのことはきっと日本では体験できないことであろう。

一言、現在技術を学んでいる方にアドバイスがあるとすれば、最先端の技術を持つ日本で学んだ技術を、どこでどのように生かすことができるのか、是非日本国内でなく、世界を見渡し、活躍の場を探してみたいと思う。また、先進国の我々が、技術の乏しい国からも学ぶことがあるということを是非理解して欲しいと思う。途上国の生活は辛いことばかりではなく、これから発展していこうという意気に溢れ、日本よりも日々エキサイティングであると感じる。

不安に陥ることもあるが、とにかくポジティブにstep by stepで活動していきたい。カウンターパートの口癖がこの言葉、「Step by step! but, don't stop by stop!」である。ゆっくりでも良い、少しずつでも前進することを目指して、今しばらくネパールと共に歩いていこうと思う。



ゴミ調査



庭造り